

パリ通信・第149号

ラ・ロッシュェルの洗礼式

5月は日本と同じくフランスも大型飛び石連休で多くの人々が動く。1日(水)メーデー祝日、8日(水)第二次世界大戦終戦記念日、8日(木)キリスト昇天祭の祭日で5日仕事を休むと12連休が取れるカレンダーである。今年は「復活祭」(移動祭日)から40日後の「キリスト昇天祭」が終戦記念日の翌日になったことで8日から12日まで5連休を取るのが一般的でフランス各地が観光で賑わっていた。さらに「復活祭」から50日後の「聖霊降臨祭」月曜日(祭日)があり、5月は夏のバカンスを外してフランス人が働かない時期である。

また5月、6月は木々の緑が青々と茂り、初夏の太陽にも恵まれ、結婚式や洗礼式が最も多い。フランスの結婚式と洗礼式は土曜日に行われるのが一般的で、11日(土)ラ・ロッシュェルで洗礼式に招かれる機会を得た。パリからポワチエ、ニオールを経由して西南に400km離れた街で列車で3時間半の大西洋に面した街である。



1980年代後半フランス留学時からお世話になっているフランス人夫妻(ジャン・イヴとブリジット)の長男(オリヴィエ)に女の子が誕生し、1歳になるのを待って洗礼式が行われた。長男オリヴィエはパリ生まれでソルボンヌ大学に留学中だった中国人ユと結婚、ロンドンに移住し金融機関の仕事をしている。



昨年4月に生まれた女の子はフランス名シャルロット、イギリス名アリス、中国名シャシャで英仏の二重国籍だ。洗礼式は祖父母が準備する行事だそうで、オリヴィエの両親ジャン・イヴとブリジットが式の手配をしていた。そもそもジャン・イヴがパリ「INALCO」(フランス国立東洋言語文化学院)(通称イナルコ、ラングゾと呼ばれる国立大学)で日本語を学んでいたのが私たちが知り合うきっかけだった。

ジャン・イヴのお父さんはフランス海軍の上層で横浜、長崎など日本をよく知っていて、ジャン・イヴはその影響で日本虜虜になった。イナルコの卒業論文は「勝海舟」で、「咸

「臨丸」に乗って太平洋を横断し、アメリカを視察してきた幕末の国際人勝海舟に興味を持ったそうである。論文はフランス語だったが、幕末の資料など日本語文献と一緒に読む手伝いをするのが縁の始まりだった。同じくイナルコでタイ語を学んでいたブリジットと知り合い結婚した。

今年90歳になるブリジットのお父さんは現役中はイギリスの石油タンカーの船長で世界の港をよく承知していて「横浜港で雨に遭った時、美しい日本女性が傘を差し掛けてくれて日本の大ファンになった」そうである。海が大好きでフランスの高度成長期1960年代にラ・ロッシュェルの開発地に大きな庭付き一戸建てを購入された。

ラ・ロッシュェルのサクレクール教会



洗礼式の様子



1962年から1968年ドゴール大統領下首相を務めたジョルジュ・ポンピドゥ(1911-1974)(ドゴール大統領の後継者として1969-1974大統領)時代は日本に次いでフランスが高度成長を成し遂げた時で、高速道路、パリCDG空港、フランス各地に原子力発電所ができた。ラ・ロッシュェルの家が完成した1967年ブリジットのお父さんが接木をしたという銀杏が庭に大きな陰を作っていて家族の集いの場になっている。

シャルロットの洗礼式に家族4世代が集まり、洗礼後の会食は祖母に当たるブリジットが準備し、出席してくれた人にはシャルロット(Charlotte)の頭文字「C」を刺繍した小袋に詰めた「ドラジェ」(アーモンドコンフェクション)が配られた。洗礼式はラ・ロッシュェル教会区の一つである「サクレ・クール教会」で18:30から行われた。ローマ・ビザンチン

様式の新しい教会で、明るい内部正面にキリストの心臓を配した赤いステンドグラスが印象的である。洗礼は一般のミサに組み込まれ1時間半の長い式典で、毎年5月11日に火を灯すようにと大きな長い蝋燭が渡された。洗礼の代父はオリヴィエの弟チボーでアムステルダムでアメリカのIT企業技師として勤務、代母はユの同僚でロンドンに住むインド人スリー(サンスクリット語で美の意味)。今の若いフランス人世代は給与やより良い生活環境を求めて進んで海外にも出るが、家族を大切にしフランス文化と伝統が受け継がれていくのを見る思いだった。

写真は左から父、代父に抱かれるシャルロット、代母 母

